

職」という項目を含めなかったが、ここでの結論に大きな影響はないと思われる。

- (40) 支持政党も支持可能政党もない人(無党派)の年齢(平均四五・二六歳)と、共産党が社民党を支持政党か支持可能政党のいずれかにあげた人(左派)の年齢(平均五〇・五六歳)との間に有意差は認められなかった(検定で確率は〇・二一六七)。

- (41) 針谷大輔『右からの脱原発』(ケイアンドケイプレス、二〇一二年)。小林よしのり『ゴーマニズム宣言SPECI A L 脱原発論』(小学館、二〇一二年)。

- (42) 他にも数人に話を聞いているが割愛する。ご協力には感

謝したい。

- (43) 前出の堀江「脱原発とスピリチュアル・ネット・リサーチから分かったこと」。LUCKY YOU「東日本大震災たとえば福島原発に愛のエネルギーを！」(二〇一一年三月二七日)〈<http://happyspiritualworld.blog119.fc2.com/blog-entry-314.html>〉。万葉音(mahane)「原発が泣くぞろ」(二〇一一年三月一六日)〈<http://ameblo.jp/mahane/entry-10832477126.html>〉。うきあか「反原発デモについて」(二〇一二年七月一九日)〈<http://ameblo.jp/roundoupro/entry-11306509056.html>〉。

原発と宗教

台湾にわきおこる力 ——原子力、権力、宗教の力

シーファンロン

施芳瓏 [訳・星野壮]

ほしの しょう

要旨

本稿は、台湾・貢寮での反原発運動にて、宗教の役割がどのように重要性を増しているのかを論じるものである。台湾における反原発運動は、もともと野党によるものであった。しかし政党政治への不信感から、貢寮の反原発運動において媽祖^{まそ}を祀る廟が最前線に躍り出てきた。本稿は三つの異なった、わきおこる「力」をめぐる争いとして、この論争を整理する。すなわち産業界において官僚と科学者たちが生み出す「原子力」、野党政治家およびエリート運動家が生み出す「政治権力」、および世俗的な(宗教的背景をもたない)反原発運動との間に同盟を作

はじめに

り上げた地域住民たちが生み出す「宗教の力」である。今日、環境は共有された資源でもあり、共有されたりスクでもあると認識されている(Beck 1995)。環境問題は今現在だけではなく、予期できない未来にも影響を与える。また、環境問題は特定の研究領域のものではなく、純粋に科学的な数値計算をこえたりスクであるがゆえに、モラル、価値、正義といった領域における問題も生じさせる。二〇一一年三月に発生した福島(日本)での原子力事故に続いて、ドイツは原子力発電への依存を二〇二二年までに止めることを発表した。先行するドイ

原子炉	炉形式	電気出力 (万 kW)	運転開始年	契約終了年
金山 1	沸騰水型	63.6	1978	2037
金山 2	沸騰水型	63.6	1979	2038
國聖 1	沸騰水型	98.5	1981	2021
國聖 2	沸騰水型	98.5	1983	2023
馬鞍山 1	加圧水型	95.1	1984	2024
馬鞍山 2	加圧水型	95.1	1985	2025

図 1：稼働中の原子炉と契約終了年

〈出典：World Nuclear Association, http://www.world-nuclear.org/info/inf115_taiwan.html (2011 年 9 月更新)〉

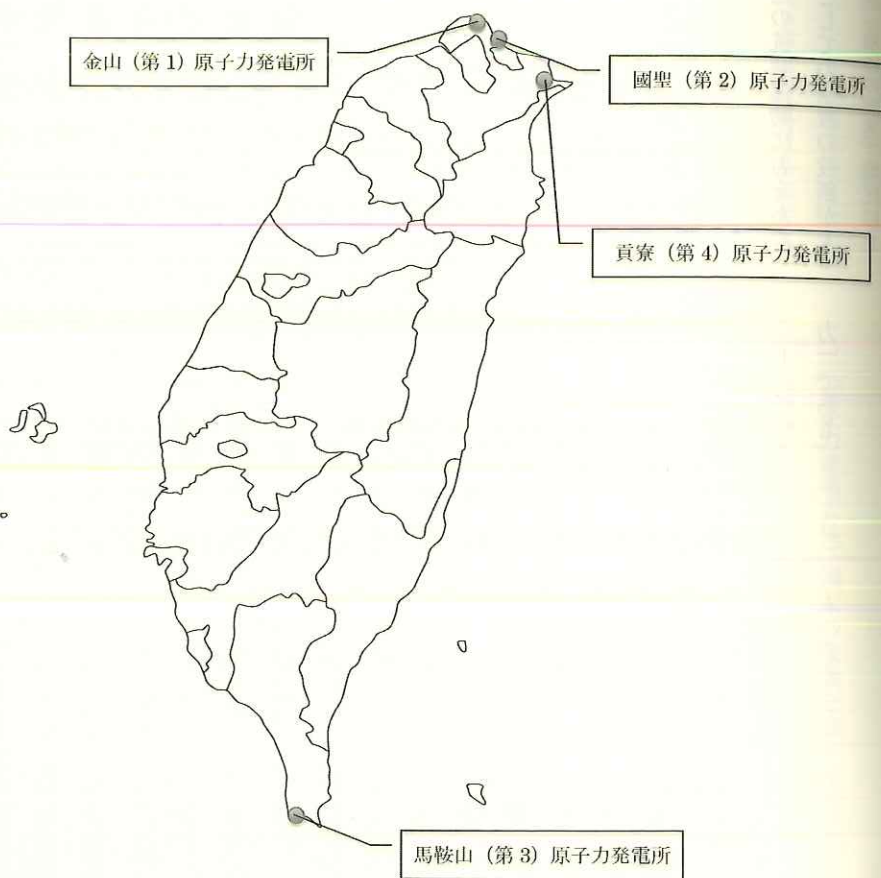


図 2：台湾の原子力発電所の所在地

〈出典：【白地図専門店】(<http://www.freemap.jp/>) 提供の白地図をもとに訳者作成〉

ツの取り組みを受けて、台湾でも二〇一二年一月に、当時総統候補者であった民進黨の蔡英文博士が、二〇二五年までに台湾における原子力発電を停止することを訴えた。

この民進党の選挙用キャンペーンは、現在の環境に対する人々の心配につけ込んで、票を獲得しようとする試み以上のものには受け取られなかった。なぜなら、台湾で現在稼働している三つの原子力発電所は、いずれにせよ、二〇二五年頃までには老朽化し廃炉となるからである（二〇一一年七月三日と八月八日にインタビューした環境問題の運動家たちによる）。現在台湾には三つの原子力発電所に計六基の原子炉が存在する。金山発電所と國聖発電所が台湾島の北端に位置し、馬鞍山発電所は島の南端に位置する。もっとも古い金山の原子炉はもとと二〇一七―一八年に年限を迎える予定であり、他の原子炉は二〇二一―二〇二五年に年限を迎えることになっていた。ところが、実際には金山の原子炉にも二〇年間延長された二〇三七―二〇三八年までの年限が与えられている（図一を参照）。

古い原子炉にはこのように終了年限が予定されているので、今日の台湾でもっとも大きな論争は、台湾島北東部の海岸部に位置し、旧台北県（二〇一一年まで）、現新北市内にある貢寮における四つめの原子力発電所の計画をめぐるものであるといえる。この計画は一九八〇年にはじめて発表され、現在発電所は稼働予定の段階にある。この問題に関する蔡英文の見解が、二〇一一年六月の『台北時報』紙上に掲載された。

第四原子力発電所の建設に関して、蔡は建設期間中には賛成していたのに、最終的な稼働に反対した。その理由を聞かれると、「最終判断を下す前に、建設契約を破棄する場合の補償コストを今一度確認する必要がある」と述べた。（Lee 2011）

第四原子力発電所の重要性を鑑みて、筆者は貢寮周辺の、草の根の反原発運動に焦点をあててフィールドワークを行ってきた。おおよそ三カ月、二〇一〇年九月下旬から一〇月にかけて、また二〇一一年七月、八月と現地